

道徳の衝突とはいかなる現象か
—ブルデューの Heterarchy という見取り—

國本 哲史 (本学社会学研究科修士課程)

個々人の道徳が衝突するという現象を、社会的にはどう捉えることができるか。デュルケームの方法論的集合主義と、ウェーバーの方法論的個人主義を導き手として、ブルデューが示したヘテラルキーへと繋げながら、道徳の衝突を、単に個人間の問題枠組みから、社会制度や集団、組織間へと通用するマクロな視点で考えてみたい。

ヘテラルキーとは一般に、ヒエラルキー内の階層間の関係を問う方法論である。しかし、ブルデューは、多様な価値ヒエラルキーを立て、そのヒエラルキー同士の関係も視野に入れた。例えば、文化資本と、経済資本が挙げられる。ブルデューの言うところによれば、教授や芸術家は文化資本が高い。ポップカルチャーよりも古典芸術を好む一方で、前衛芸術にも興味を示すことができる。文化資本の低いものは、とある写真を見て、取るに足らないと切り捨てたり、芸術はよくわからないと放棄したりするなど、良さを見つけようとしめない。他方、経済資本の上層にいるのは、商業の世界で活躍する人々である。

二つの資本を共に高めている人間はいるだろうが、片方を高めている場合（教授や芸術家になったからといって、経済資本を多く獲得できるわけではないし、成金主義と言われるように、お金を沢山稼いだからといって、それが同時に文化資本を獲得できたということにはならない）には、自分の依って立つことのできるヒエラルキーから、他のヒエラルキーへの闘争が持ちかける可能性がある。

教授や芸術家、貴族などが成金主義や、新自由主義を批判することや、昨今の権力者が美術館や博物館、もしくは人文学系の学科を閉鎖させていく流れなどは、様々な理由があるだろうが、その主要な一つに、自分と異なるヒエラルキーの上層にいる者に対してなされる自身の卓越化を端に発した、嫌悪感が挙げられるだろう。

個々人の善／悪の判断を含む道徳の衝突という現象を、ヘテラルキー的見取りによって眺めることによって、我々がある善さ／悪さを提示する際に考えなくてはならないことが見えてくる。それは、その人々の属しているヒエラルキーとの関係を考えなくてはならないということである。

ただ、この枠組みは問題もある。それは、これらの闘争が可能であるのは、それぞれのヒエラルキーの上層に位置する人に限られるということである。そもそも、どのヒエラルキーでも下層に属しているような人間が、どのように闘争に参加すればいいのか、という問いは放置されたままである。

例えばアメリカ至上主義に対抗して、アジア至上主義のようなものを唱えるにしても、歴史的なアドバンテージを持つイランや中国、現在大国となった日本、韓国のような国を除いた国々がどのようにアジア至上主義を持ちだすことができるのか。せいぜい第三局という、二項対立をずらした形での参加しかできないのではないのか。

学会発表では、こうした内容を先行研究や引用を含めながら精緻に行いたいと考えている。